

「ただ一人の人間」であり続けたソントグは高橋論壇時評に似合わない

《ベルリン滞在中のアメリカ人作家スーザン・ソントグは、その（引用者註－9.11の）2日後、このことについて意見を書き、テロから6日後に発売された雑誌に掲載された（③）。ソントグはこう書いている……まず、共に悲しもう。だが、みんなで一緒に愚か者になる必要はない。テロの実行者たちを「臆病者」と批判するが、そのことばは彼らにではなく、報復のおそれのない距離・高度から殺戮（さつりく）を行ってきた者（我らの軍隊）の方がふさわしい。欺瞞（ぎまん）や妄言（いんべい）はなにも解決しない。現実を隠蔽（いんぺい）する物言いは、成熟した民主国家の名を汚すものだ、と。

この発言は、「団結」を乱すものとして、全米で憤激を巻き起こした。ソントグは「アメリカの敵」を擁護する「売国奴」と見なされ、殺害予告をされるまでに至った。それでも、ソントグはすぐにニューヨークに戻り、発言を続けた。

彼女は、どうしてそんな発言をしたのだろうか。おれは、ずっと考えてきた。もしかしたら、彼女は、殺されても仕方ないと思っていたのかもしれない（彼女は、長期にわたる癌（がん）闘病生活を送っていて、2004年に亡くなる）。愛する祖国が、憎悪（にくしみ）にかられて、暴走（ぼうそう）するのを止めるために、「正気」に戻るよう促すためには、それしか方法がなかったのかもしれない。実際、ブッシュ政権下のアメリカはやがて、「イラクには大量破壊兵器がある」という情報を捏造（ねつぞう）して、戦争を開始することになるのである。

おれは、ソントグのような人間こそが、最高の愛国者ではないかと思う。同じような事件がこの国で起こったとき、同じような感想を抱いたとして、ソントグのようなことが書けるか、といわれたら、おれには無理だ。そんな勇氣はない。

ソントグはこんなことをいっている。「自分が大切にしている諸権利やさまざまな価値の相克に、私は取り憑（よ）かれています。たとえば、ときとして、真実を語っても正義の増大にはつながらないということ。ときとして、正義の増大が真実の相当部分を押さえ込む結果になるかもしれない、ということ。（略）

私自身の見解は、もし真実と正義のどちらかを選ばざるをえないとしたら——もちろん、片方だけを選ぶのは本意ではないが——真実を選ぶ」（④）

高橋論壇時評でソントグが出てくる箇所である。③は「9.11.01」（『同じ時のなかで』（2009年）所収）、④は「言葉たちの良心 エルサレム賞受賞スピーチ」（同前）だが、朝日の「誤報」（本当は？）問題を機に「反日」や「売国」のことばがより一層吹き荒れるようになった日本社会から、9・11直後の「愛国」ということばが氾濫したアメリカ社会を想起しているのであり、そしてソントグの9・11発言によって彼女が《「アメリカの敵」を擁護する「売国奴」と見なされ、殺害予告をされるまでに至った》ということ述べているだけのようにみえる。もちろん、そんなわけがない。本当はここでソントグの9・11発言に対する「売国奴」呼ばわりをもちだすのはふさわしくないのに、つまり、朝日の「誤報」問題を機に吹き荒れている（といっても一部の）日本社会と9・11直後のアメリカ社会とを同一視できないばかりか、朝日が問題を引き起こしている点でも全く異なるのに、高橋論壇時評は強引に重ね合わせようとするかのように、9・11直後のアメリカ社会とソントグを登場させているのである。

なぜか。双方の全く異なる社会文脈を無視して、あたかも日本で容赦なく叩かれている朝日（朝日系文化人も含む？）をソントグの位置に擬しているかのようにみえる。もちろん、もしソントグがいまの日本に生きていれば、間違いなく朝日にむかって、《欺瞞（ぎまん）や妄言（いんべい）はなにも解決しない。現実を隠蔽（いんぺい）する物言いは、成熟した民主国家の名を汚すものだ》と書いたにちがいないし、「もし真実と正義のどちらかを選ばざるをえないとしたら」、朝日が「正義の告発」を選ぶとしても、自分は「真実を選ぶ」というように、自分を朝日の対極に位置づけられると思われるが、ソントグについてほとんど知らず、私のように考えることもない読者とすれば、高橋論壇時評がつくりだしている文脈の中で時評子の意

図どおりに読んでしまうにちがいない。読者が立ち止まって深く考えることを好まない高橋論壇時評とすれば、朝日に対する「反日」や「売国」のことばは9・11直後にソントグに投げつけられた「売国奴」のことばと同じであると受けとめられたら、それでよいのだということかもしれない。

いうまでもなくそれは詐術的行為にはかならない。その詐術のいくつかを次に指摘してみる。

一つは、《彼女は、どうしてそんな発言をしたのだろうか。おれは、ずっと考えてきた。もしかしたら、彼女は、殺されても仕方ないと思っていたのかもしれない（彼女は、長期にわたる癌闘病生活を送っていて、2004年に亡くなる）。》という高橋論壇時評の記述についていえば、知らないはずはないと思われるが、ソントグは死の間際まで生きることを願っていた。《長期にわたる癌闘病生活を送って》たからとって、《殺されても仕方ないと思っていた》はずがなかった。高橋論壇時評からは遠い資質であるが、彼女は命の危険を冒してでも発言しなくてはならないと思ったから発言したのである。高橋論壇時評にたぶんそのことがわからないのは、命の危険を冒してでも発言しなくてはならない場所に立つことをつねに回避しようとしていたからだ。

いくら《おれは、ずっと考えて》こようと、ソントグの思考の質と「おれ」の思考の質とは交差しようがなければ、とうてい無理なことであり、むしろ《おれは、ずっと考えて》こなくてはならなかったのは、高橋論壇時評でどうして「おれ」は池上コラムがそうであったように、「検証の不十分さ」と「謝罪」を朝日に突きつけることができなかったのかを深く考え続けることであろう。《彼女は、どうしてそんな発言をしたのだろうか。》を問うなら、「おれ」はどうして朝日にそんな発言をしなかった（できなかった）のだろうか、をまず問うべきなのだ。

二つは、《同じような事件がこの国で起こったとき、同じような感想を抱いたとして、ソントグのようなことが書けるか、といわれたら、おれには無理だ。そんな勇氣はない。》という高橋論壇時評の記述については、「おれ」がソントグと《同じような感想を抱くこと自体がありえないことであり、そのような仮定自体が成り立たない。なぜなら、《同じような感想を抱いた》とするなら、どうしてもソントグと同じように（もちろん、別の言い方で）書かざるをえなくなるだろうからだ。《同じような感想を抱いて》そうしないということは考えられない。「書く」ということは自分を予期しないところまで連れだそうとするからだ。

《同じような感想を抱くはずがないから、「おれ」は《ソントグのようなことが書け》ないのである。高橋論壇時評でどうして「おれ」が池上コラムのように、「検証の不十分さ」と「謝罪」を朝日に突きつけることができなかったのかといえ、そもそもそんなことを考えていなかったからである。したがって、《おれには無理》なのは、《そんな勇氣はない》からではなく、ソントグのような表現の位相にはないから、勇氣も必要ないし、湧き上がってくることもないのである。「勇氣」の問題にすり替えてはいけぬ。

そもそも高橋論壇時評にソントグをこのようなかたちで登場させること自体が、頓珍漢として笑われなければならなかった。なぜなら、ソントグは「ただ一人の人間」として発言し、「ただ一人の人間」として全米で巻き起こった怒号の嵐に立ち向かっていたからだ。それはちょうど、アイヒマン裁判を傍聴したユダヤ人であるハンナ・アーレントがアイヒマンにナチスの巨大な悪ではなく、無思考ゆえの凡庸な悪を見出し、誰もがアイヒマンになりうると指摘して世界を敵に回したかのような非難の嵐に直面したときも、そのうえ同胞であるユダヤ人指導者層が虐殺を阻止するどころか、反対の結果を生む振る舞いを行ったという疑義を提出することによって、ユダヤ人社会からも反ユダヤ主義者として糾弾され、罵詈雑言を浴びせかけられたときも、彼女は「ただ一人の人間」として直立して抗しつづけたのと同じであった。

ソントグを登場させるなら、彼女の記述や発言の断片を意味ありげに引用するのではなく、「ただ一人の人間」として存立しつづけた彼女にいくらかでも触れるように登場させ給え。同時に、「勇氣」などでごまかさず、「おれ」も高橋論壇時評も「ただ一人の人間」としての場所をつくり出せていないことを深く自覚しながら、そして、ソントグを登場させたからには、彼女を問題の拡散に利用するのではなく、彼女がくっきりと浮かび上がらせている「ただ一人の人間」に支援されるように、今後書くことを、生きていくことを自分に宣誓し給え。

